

国際レベルで活躍したハンドボール選手における 実践知の獲得過程に関する事例研究

會 田 宏, 坂 井 和 明
(武庫川女子大学文学部健康・スポーツ科学科)

The developmental process of learning applicable technique and skills : a case study of a handball player who excelled at the international level

Hiroshi AIDA, Kazuaki SAKAI

*Department of Health and Sports Sciences, School of Letters
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

Abstract

The purpose of this study was to understand the process of how applicable technique and skills develop regarding individual tactics in prominent ball game players. To this end, a handball player who had excelled at the international level was interviewed regarding their shooting techniques. A qualitative analysis was used to identify the following points.

- 1) Applicable technique and skills of the interviewee developed in several stages, including the encounter, the understanding, the loss, and the acquisition of skills.
- 2) The technique is understood instantaneously, rather than incrementally, by chance upon receiving the sports tip in the encounter stage.
- 3) Various techniques are understood by physically performing a technical element as well as perceiving and acknowledging the individual tactics.
- 4) Once the technique is embodied completely, no thought is given to performing the individual tactics involved.
- 5) The acquisition of the technique indicates that one has reached the stage at which individual tactics can be performed subconsciously.

緒 言

スポーツにおいて動きを指導する場面では、「動きがどのようなになっているのか」といった客観的な情報を選手に与えるだけでなく、「どのような感じで動くことができるのか」といった主観的な情報を伝えることが効果的である。スポーツ選手の持つ主観的な情報は、スポーツ指導の実践現場においては、コツと呼ばれる。コツは、「運動ができるようになる勘どころを表現したもの」¹⁾であり、「運動感覚に支えられた身体の知恵」²⁾である。

動きのコツは、選手固有の身体や運動感覚能力と深くかかわっており、同じような動きができて、そのコツは個人間で異なることも多い。そのため、動きのコツは、指導実践現場では研究の必要性が指摘されていた^{3,4,5)}にもかかわらず、客観性がないという理由から国内外を問わず、ほとんど研究される

ことはなかった。しかし、近年、調査方法の開発^{6,7)}および質的研究方法^{8,9)}の適用に伴い、卓越した選手の持つ動きのコツが実践知として知識化されるようになり、効果的な指導に役立つ主観的情報として実践現場に提供されるようになってきた^{10,11)}。

マイネル¹²⁾は、運動学習を、逆戻りすることのない3段階で説明している。それは、初めて運動ができ、基本的な運動経過を、あるまとまりをもって実施できる粗形態の段階、動きを繰り返すことにより、動きに修正が加わり、安定し、洗練された運動になる精形態の段階、変化する場合に、どのように対応するのかを直感しながら、同時に何のためらいもなく自由自在に動ける自動化の段階である¹³⁾。このことは、長期的な視点をもって選手の指導をしたり、選手の運動経験、知識、年齢に相応した指導をしたりするためには、指導者は、段階ごとの学習のねらいや課題を明確にする必要があることを示している。

卓越した選手の実践知は、さまざまな習練を積んで初めて達成できる最高の運動感覚能力を理解するための手がかりになる¹⁴⁾。しかし、それは、粗形態および精形態の学習段階の選手にとっては、レベルが高すぎて「参考にならないコツ」になったり、習熟を妨げる「早すぎるコツ」になったりして、育成段階の選手を混乱させる情報にもなりかねない。卓越した選手の実践知をそれぞれの習熟段階に適応させ、より充実した指導を行うためには、卓越した選手が実践知を獲得した過程についても検討する必要があるだろう。

そこで本研究では、国際レベルで活躍したハンドボール選手を対象に、獲得した動きのコツについてインタビュー調査を行い、コツ獲得の過程に関する語りを質的に検討し、実践知の獲得過程に関して事例的に明らかにする。

方 法

1. 対象者

対象者は、国際レベルで活躍し、現役を引退していた1名のハンドボール競技選手である。これは、本研究者が研究目的を達成するのにふさわしいと判断し、協力依頼したものである。表1に対象者の競技プロフィールを示した。対象者には、研究の趣旨を十分に説明し、調査への協力および研究成果の実名での公開の了解を得た。

表1 対象者のプロフィール

氏 名	堀田敬章氏(右サイドプレーヤー、左利き)
主な戦績	1995年アイスランド世界選手権大会出場
競 技 歴	高校1年からハンドボールを始める。171cmという身長ながら努力と工夫を重ね、高校・大学時代は、いずれも全国大会で活躍。大学卒業後、湧永製薬に入社。実業団に入って4年目(1990年)、藤本コーチとの個人練習でシュートフォームを改造し、サイドシュートのコツを獲得する。その後、日本を代表する右サイドプレーヤーに成長し、全日本代表にも選ばれ、全盛期を迎える。日本リーグでは第15回(1990年)と20回(1995年)大会において最高シュート率賞を、第20回大会から3大会連続でベストセブンを受賞。

2. インタビュー調査の内容と方法

調査内容は、現役時代に得意であった技や動きのコツ、コツを獲得するまでのプロセス、コツ獲得後の変化などであった¹⁵⁾。コツの同定を容易にするために、インタビュー調査の2週間前に、調査内容に対して自由記述形式で回答を求めるアンケート調査票¹⁶⁾を対象者に郵送し、現役時代を振りかえって記述して、返信してもらった。インタビュー調査時には、それを補助資料として用いた。インタビューは、本研究の筆頭執筆者が行った。すべての発言はMDレコーダを用いて録音し、デモンストレーションはビデオカメラを用いて撮影した。調査は、2002年1月21日に行った。

3. 分析方法

インタビュー調査の VTR 記録から、すべての発言内容を文章におこし、それを、獲得したコツ、コツ獲得のプロセス、コツ獲得前後の変化、ジュニア期の指導への示唆の 4 つの項目にまとめた。また、身体を使ったデモンストレーションをイラストにした。調査内容のまとめとイラストを対象者に郵送し、それが発言の趣旨と異なっていないか、加筆および訂正箇所はないかを確認した¹⁷⁾。これらの作業を終えたものを、研究の基礎資料とした¹⁸⁾。

本研究では、卓越したスポーツ選手における実践知の獲得過程を事例的に明らかにするために、得られた基礎資料を、コツ獲得のプロセスとコツ獲得前後の変化に着目して、テキストとして再構成した。

テキストの分析は、本研究の筆頭執筆者と共著者の 2 名で行った。この 2 名は、いずれも球技を専門とし、競技場において選手および指導者としての活動経験を持つ研究者である。このことは、テキストの分析が、対象者の語りにリアリティを感じる現場感覚および生成的視点を持って行われたことを保障するものであると考えられる。

結 果

以下に、堀田氏が獲得した動きのコツと、コツ獲得の過程に関するテキストを示した。なお、テキスト中の()は、本研究者の補足を示す。

1. 獲得した動きのコツ

キーパーの手や脚を見て、ボールを放す瞬間に手首をひねり、シュートコースを撃ち分けるプレーです。このシュートでは、まず、腕を上げて、肩より高い位置にボールを持って行って、キーパーの体を 1 回伸ばさせます。腰のあたりまで腕を下ろしてサイドハンドスローに持っていき、キーパーの脇横、ゴールの中段をねらいながら、そこから手首を上にはねって撃つ(しゃくる)というような感じです(図 1)。サイドハンドに腕を落として、キーパーの脇横(ゴール中段)を狙いにいって、ボールを放す直前までキーパーを見ていて、腕のモーションに対して、キーパーが手を下げるのと脚を上げるのが遅い時(中段を止めに来るのが遅い時)には、中段を撃ち抜いてしまいます。また、キーパーの脚が上がるのが早ければ、手首を下にはねって股下に撃ちます。それはキーパーの体勢を見て変えていて、それができた時はもう、ほとんど撃ったら入るような感じでした。

2. コツ獲得の過程

高校の先生にシュートでボールを放す時に、手首を変化させなさいと言われました。先生は腕を使って見本を示すことは全然しませんでした。口で言っただけなので、最初はイメージが湧きませんでした。野球のカーブやシュートみたいな感覚だろうと思っていました。イメージをつかもうと 1 つ上の先輩にやってもらったりしましたが、ボヤーとしか分からなかったし、練習しても、何のきっかけもありませんでした。

手首の変化が初めてできたのは、サイドシュートでのしゃくりです。そのプレーは 1 年生の終わりに、練習試合で突然できたんです。先生に言われてから半年ぐらいいは経っていると思います。3 月の選抜の全国大会が終わると、いろいろなチームが名南工業に集まって練習試合をするんです。ずっと試合ばかりのきつい合宿でした。左利きなのに、選抜までは左サイド(通常、右利き選手のポジション)をやっていて、選抜が終わって右サイド(通常、左利き選手のポジション)に変わったんです。ポジションが変わって、シュートの撃ち方も分からないし、練習試合をやってもシュートが全然入らなかったんですが、ある時、シュートを撃ちにいって、高くボールを持ってジャンプして、空中でキーパーのどこに撃つか迷って、迷って、迷って、スイングするのではなく、ボールを置きにいくシュートになってしまったんです。シュートを置きにいく時に、トンと着地して、その着地した瞬間に、なぜか手首が自然と返っていたんです。今考えると完全な着地(ラインクロス反則)のシュートだったんですが、それをレフリーが反則を取らずにゴールインになったんです。その試合が終わってから先生に「今のや！」みたいに言われたのがきっかけです。

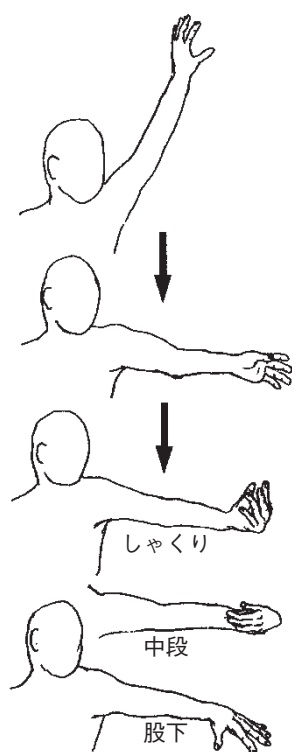


図1 リリースにおける手首の使い方

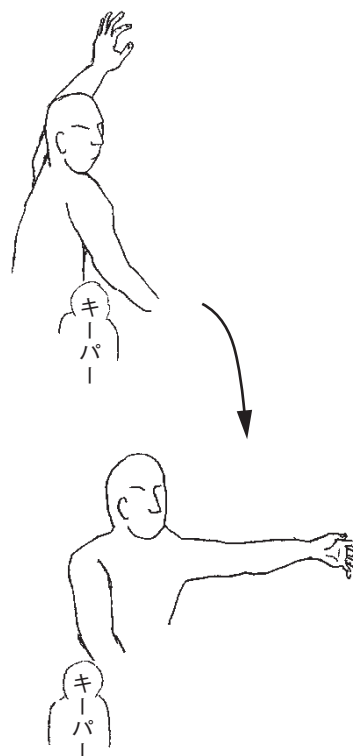


図2 スイングによってキーパーをずらす方法

練習試合でコツを初めてつかんでからは、インターハイ (8月) くらいまでは、シュートが好きなように入っていました。2年生の時は3年生にゲームメーカーがいたので、コーナーで待っていて、ずらしてもらって、ゴールエリアの中へ跳び込んで、キーパーをしっかりと見極めて、「そのまま撃つ」「しゃくる」「下に落とす」の撃ちわけができていました。でも、近目 (ニアポストのコース) には撃てませんでした。

その当時、そのコツを本当に自分のものにするためにしたことはありませんでした。自然とサイドハンドでしゃくって撃っていました。高めにバックスイングして (シュートに) 入って、サイドハンドで撃ちにいくやり方を自分なりにしだしてから、ハンドボールの実用書に載っていたサイドシュートの連続写真を結構見て、「こう撃ちにいくとキーパーの体勢がこう見えるから」と手首の変化をイメージしました。ウェイトトレーニングはありましたが、それはチーム全体でやるウェイトで、そのシュートの感覚を継続して持たせるとか、アップさせるトレーニングは特別しませんでした。

その後、自分たちが最上級生になって (インターハイが終わって)、オフェンスがローリング (ポジションをさまざまに変えながらシューターを作り出す戦術) をしだしたんです。ローリングしだしてからサイドシュートを忘れてしまって、キーパーの捕り方に関係なしに、ただ低めに突っ込んで入って、しゃくって撃つだけになってしまいました。上に撃ちたいから、上体を突っ込んで、キーパーの体勢を下に崩して撃っていたんです。それにキーパーがごまかされれば (シュートが) 入りましたけど、決め撃ちになって、キーパーをしっかりと見極めて変化することはできなくなってしまいました。

最初は高校の先生に、ループシュート (キーパーの頭の上にボールをふわりと浮かすシュート) も禁止されていました。なぜか分かりませんが、「ループシュートを撃ったら、手首の使い方ができなくなる」と言われていたんです。自分ではローリングをできなくなった理由にしていたんですが、3年生になって、先生が「ループも撃っていい」と言い出したら、本当に撃てなくなったんです。しゃくりはできるが、キーパーを観る「間」がなくなって、キーパーとの勝負ができなくなったんです。大学に入って、その4年間

も全然できませんでした。ただ、決め撃ちでのしゃくりができただけです。大学の3年か4年ぐらいの時に、近目には撃てるようになったんですけど、サイドシュートが入る気はあまりしませんでした。それから、湧永に入って、最初の3年間ぐらいは全くだめで、決め撃ちではしゃくりを撃てるけど、それが読まれたらキーパーが手を下げなくなって、試合に使ってもらってゴールしても「たまたま入っちゃった」というような感じで、全く自信がありませんでした。その時は、シュートにいくのにボールをかついで入るモーションだったので、キーパーが遠目(ファーポストのコース)をつぶして、近目を撃たせる捕り方をしてくると、もう撃てなかったんです。

湧永の人(チームメイト)には「クイックシュート(早いタイミング撃ってキーパーのリズムを崩すシュート)が撃てないと生き(残れ)ない」と言われました。その時に、コーチだった藤本さんの撃ち方を真似して、シュートの入り方やフォームを変えたんです。

シーズンオフに、バルセロナ(オリンピック)を目指して、湧永の全日本選手がずっと練習を抜けていた時があって、チームの練習も1:1とか2:2とかばかりだった時期がありました。その時に、藤本さんに、結構つきっきりでシュート練習を見てもらったんです。その時期に湧永の体育館ができて、専用のウエイトルームでウエイトもすごくやりだしました。

コツをつかんだのは、実業団に入って4年目のシーズンで、26歳になる年です。その年の実業団選手権では、シュートを撃てば入る状態になりました。

藤本コーチに教わって、ボールを後ろに回して、左手側から来るディフェンスをかわしてジャンプしながら、肩の入った右肩にキーパーの位置を合わせさせるようにしました。そこからサイドハンドに持っていき、シュートコースを変化させました(図2)。ただ、サイドハンドスローでそのまま振り下ろして撃つとキーパーに捕られるので、肩幅と腕の分、キーパーの位置をずらすために、腕を遠まわしさせて、サイドハンドスローで腕をいっぱいまで伸ばして撃ってしまいました。しゃくる時には、その状態から、手首でボールを真上にカツンと上げました。

その他には、ボールを後ろに回して、右肩を入れて跳び込んで、そのままループシュートを撃ったり、ゴールエリアに大きくブロードしてずれていきながら、頭の上で手首をひねって近目に落としたり、また、落とすような振りで腕をスイングさせながら、スッと肘(の力)を抜いて近目の上に撃ったり、キーパーが左から右へ調節して位置をとろうとする時や脚を上げようとする瞬間に、バックスイングする途中で、サイドハンドスローで手首だけをひねって撃ったり、腕ごと振るんじゃなくてクイックをイメージして、ソフトボールのピッチャーのウインドミルみたいな感じで撃ったりとか、いろいろなシュートを撃っていました。

感覚的には、シュートを撃つ瞬間、キーパーの動作がスローモーションのようによく見えるようになりました。えらそうな言い方をしたら、川上哲治の「ボールが止まって見えた」という感覚はこういうことかなと感じました。最初に高校の時に、完全な着地で撃った時は、シュートを撃つ瞬間までどこに撃っていいか分からなくて、躊躇していました。自信を持った後は、ボールを放す最後の瞬間までキーパーを見ているけれども、この場合も撃つところを決めていないんです。「こういうふうに入って、こう撃つてやろう」と決めていた時でも、何も意識しないで勝手に違うコースに撃って決まるくらい調子がよかった時もありました。

自分自身の浮き沈みとか、体の状態によってキーパーが見えて撃てている時と感覚的に決め撃ちしている時もあったし、得意なキーパーと苦手なキーパーがやっぱりありましたけど、最終的に自分の一番の体勢で撃ちながら、「キーパーとのかけ引きの瞬間が見極められるかどうか」というのは常に頭の中で持ちながら、常に完璧を求めました。それができていれば、どんなキーパーでも決められる自信がありました。

考 察

1. 実践知の獲得における4つの段階

1) 「コツとの出会い」の段階

堀田氏は、サイドシュートのリリースにおける手首の変化が初めてできたときの様子を、「突然できたんです。…ポジションが変わって、…空中でキーパーのどこに撃つか迷って、ボールを置きにいくシュートになって…着地した瞬間に、なぜか手首が自然と返っていたんです」と語っている。初めてのポジションで、今まで経験したことがないようなシュート体勢の中で、偶然に、その運動が姿を現してきたのである。これは、わからなかった動きかたが身体によって「あっ、そうか」と合点する瞬間、私はそのように動くことができるという運動感覚能力を身体が持つ瞬間¹⁹⁾であり、「コツとの出会い」と表現することができる。

コツと出会うまでは、「手首を変化させなさいと言われ…、最初はイメージが湧きませんでした。…練習しても、何のきっかけもありませんでした」と語っていること、運動が初めてできる偶発位相では、まぐれ当たりを特徴とすること²⁰⁾、コツの部分部分が少しずつわかってきて、運動のかたちができ上がっていくのではないこと²¹⁾などを考え合わせると、コツとの出会いの瞬間は、偶然に、突然に、一気にやってくると考えられる。

2) 「コツの理解」の段階

「コツをつかんだ」ということは、自らの身体を動かして、何らかの行為をうまくやり遂げるときに、その「動きかた」の要を自らの身体が了解していること²²⁾である。

ハンドボールのシュートは、ゴールキーパーとの対応が要求される個人戦術であり、その達成力は戦術的思考力(知覚・認知的要素)と技術力(技術的要素)に規定される²³⁾。このことは、シュートを成功させるための要は、相手の運動経過の裏側にある戦術的意図を探ることと、相手の行為に対して有効な行為で反応することの2つであることを示している²⁴⁾。

堀田氏は、コツと出会った後の数ヶ月間のプレーを振り返り、「コツを初めてつかんでからは、…キーパーをしっかり見極めて、『そのまま撃つ』『しゃくる』『下に落とす』の撃ちわけができていました」「自然とサイドハンドでしゃくって撃っていました」と語っている。この語りから、シュートを成功させるための2つの要を堀田氏の身体が了解したこと、何度繰り返しても、思うような動きの感じに出会えるようにコツの理解が進んだことが分かる。

3) 「コツの消失」の段階

堀田氏のフォワードスイングは、いずれのシュートコースに打つ場合にも、手首を変化させてボールをリリースする瞬間まで同じ動きであった。この動きによって、ゴールキーパーにシュートコースを予測できないようにさせたり、シュートコースを早い時機に予測させたり、動き出しの決断を早めさせたりして、ゴールキーパーの逆をつける条件を整えていた。しかし、コツと出会ってから約半年後、チームのプレースタイルの変化(ローリング攻撃の導入)とシュート選択肢の増大(「うかし」の解禁)をきっかけに、コツは突然と姿を消してしまう。そこでは、「キーパーの捕り方に関係なしに、ただ低めに突っ込んで入って、しゃくって撃つだけ」になっていた。フォワードスイングからリリース動作までが、ひとかたまりの動作になってしまい、相手に自らの動きの意図を早い時機に読みとられ、ゴールキーパーに適切に対応されるようになってしまったのである。「決め撃ちになって、キーパーをしっかり見極めて変化することはできなくなった」「しゃくりはできるが、キーパーを観る『間』がなくなって、キーパーとの勝負ができなくなった」「読まれたらキーパーが手を下げなくなって、試合に使ってもらってゴールしても『たまたま入っちゃった』というような感じ」という語りからは、対峙するゴールキーパーと間主観的に「対話」すること²⁵⁾ができなくなり、ゴールキーパーの行為に対して有効な行為で反応できなくなったことがうかがえる。

運動の習熟にともない、「個々の運動構成要素も運動行為全体も、ひとりでに経過していき」²⁶⁾、運動が自動化される。マイネル²⁷⁾は、自動化によって選手は負担が軽減され、来るべき困難を先取りする

のに自由な状態になること、可変性を備えないロボットのような動きの機械化は自動化とは正反対であることを指摘している。堀田氏の場合、運動が自動化されるのではなく機械化されてしまい、その結果、運動経過が鋳型化してしまったと考えられる。運動の鋳型化は、固定化されたプログラムにしたがって戦術行為が行われるタイプの行動戦略であり、大きな欠点をもつ²⁸⁾。堀田氏におけるコツの消失の原因には、コツの定着を目指して行った運動の自動化の方法に問題があったと推察できる。

4) 「コツの獲得」の段階

選手生命の危機を感じた堀田氏は、コーチとのつきっきりの練習により、コツを獲得する。これは、最初にコツに出会ってから、約10年後のことである。

堀田氏は、コツとの出会った高校時代におけるシュートの運動感覚を、「自然とサイドハンドでしゃくって撃っていました」と語っていた。一方、コツの獲得時には、技術的要素に関しては、「位置をずらすために、腕を遠まわしさせて、…しゃくる時には、その状態から、手首でボールを真上にカツンと上げました」と具体的かつ明瞭な身体操作で表現し、知覚・認知的要素に関しては、「ボールを放す最後の瞬間までキーパーを見て…撃つところを決めていない」「キーパーとのかけ引きの瞬間が見極められるかどうか」と相手の戦術的意図を読み取り、それに対応すると表現している。

「キーパーの動作がスローモーションのようによく見えるようになりました」「『こういうふうに入って、こう撃ってやろう』と決めていた時でも、何も意識しないで勝手に違うコースに撃って決まる」という表現は、他者とのかかわりのなかで、自ら動くのに何らの心身の束縛も障害もなく、まったく思うままに動いてすべて理に適っているという、運動感覚身体織りなすわざの最高の位相²⁹⁾に到達したことを示すものである。

2. 実践知の獲得過程の特徴

偶然に、まぐれにできた段階から、自分なりの動くコツをとらえ、いつやっても成功するようになるまでには、多くの特徴的な形成位相を通過しなければならない³⁰⁾。堀田氏における実践知の獲得過程は、シュートリリースにおける手首の使い方に着目すると、まぐれ当たりで偶然に「手首が返った」段階、「手首が返せる」段階、意図的に「手首を返す」段階、何も意識しないで「手首がかえる」段階を経ていった。それは、「コツとの出会い」「コツの理解」「コツの消失」「コツの獲得」という紆余曲折に満ちた、弁証法的ともいうべき形成の過程であったととらえられる。

要 約

本研究の目的は、卓越した選手における実践知の獲得過程を事例的に明らかにすることであった。この目的を達成するために、国際レベルで活躍した1名のハンドボール選手を対象に、獲得した動きのコツについてインタビュー調査を行い、コツ獲得の過程に関する語りを質的に分析した。

結果は以下の通りであった。

- 1) 対象者の実践知は、コツとの出会い、コツの理解、コツの消失、コツの獲得という過程を通して獲得されていったと解釈することができた。
- 2) コツとの出会いの瞬間は、偶然に、突然に、一気にやってきた。
- 3) コツは、個人戦術の技術的要素と知覚・認知的要素を身体が了解したときに理解された。
- 4) 習熟を目指して運動を自動化させる際、運動経過が鋳型化し、対峙する選手の行為に対して有効な行為で反応できなくなり、コツは消失した。
- 5) コツの獲得は、何も意識しないで合理的に行為できる段階への到達であった。

付 記

本研究は、日本体育協会スポーツ医・科学研究費(スポーツ振興くじ (toto)助成)、および科学研究費補助金(基盤研究C 課題番号 18500500)を受けて実施された。

文 献

- 1) 阿江通良, 動きのコツをさぐる, 体育の科学, 49, 868-869 (1999)
- 2) 金子明友, わざの伝承, 明和出版, 東京, pp.262-263 (2002)
- 3) Dale, G. A., Existential phenomenology: Emphasizing the experience of the athlete in sport psychology research, The Sport Psychologist, 10, 307-321 (1996)
- 4) 前掲 1), (1999)
- 5) ヘベル, S. A., 専門家の知-その構造と改善について-, スポーツ運動学研究, 14, 59-68 (2001)
- 6) 阿江通良 編, 平成 13 年度スポーツ医・科学研究報告 No. VII ジュニア期の効果的指導法の確立に関する基礎的研究-第 2 報-, 財団法人日本体育協会, 東京, pp.160-170 (2002)
- 7) 中込四郎, 面接調査の方法について, 阿江通良 編 平成 14 年度スポーツ医・科学研究報告 No. III ジュニア期の効果的指導法の確立に関する基礎的研究-第 3 報-, 財団法人日本体育協会, 東京, pp.3-4 (2003)
- 8) 無藤 隆・山田洋子・南 博文・麻生 武・サトウタツヤ 編, 質的心理学, 新曜社, 東京, p.3 (2004)
- 9) 波平恵美子・道信良子, 質的研究 Step by Step -すぐれた論文作成をめざして-, 医学書院, 東京, p.1 (2005)
- 10) 會田 宏, 国際レベルで活躍したゴールキーパーの動きのコツに関する事例研究, (財)日本ハンドボール協会 ハンドボール研究, 9, 69-74 (2007)
- 11) 會田 宏, ハンドボールのシュート局面における個人戦術の実践知に関する質的研究: 国際レベルで活躍したゴールキーパーとシューターの語りを手がかりに, 体育学研究, 53 (1), 61-74 (2007)
- 12) マイネル, K. / 金子明友 訳, マイネル・スポーツ運動学, 大修館書店, 東京, 第 3 版, pp.374-419 (1983)
- 13) 三木四郎, 新しい体育授業の運動学, 明和出版, 東京, pp.153-158 (2005)
- 14) 前掲 2), pp.512-513 (2002)
- 15) 前掲 7), (2003)
- 16) 前掲 6), (2002)
- 17) フリック, U. / 小田博志ほか訳, 質的研究入門-〈人間の科学〉のための方法論, 春秋社, 東京, p.285 (2002)
- 18) 會田 宏, ハンドボール・堀田敬章氏の面接調査結果, 阿江通良編 平成 13 年度スポーツ医・科学研究報告 No. VII ジュニア期の効果的指導法の確立に関する基礎的研究-第 2 報-, 財団法人日本体育協会, 東京, pp.141-146 (2002)
- 19) 前掲 13), p.149 (2005)
- 20) 前掲 2), p.422 (2002)
- 21) 前掲 2), p.425 (2002)
- 22) 前掲 2), p.220 (2002)
- 23) 會田 宏, 個人戦術, (社)日本体育学会監修 最新スポーツ科学事典, 平凡社, 東京, p.179 (2006)
- 24) 前掲 11), (2007)
- 25) 前掲 11), (2007)
- 26) 金子明友・朝岡正雄 編著, 運動学講義, 大修館書店, 東京, p.147 (1990)
- 27) 前掲 12), pp.406-409 (1983)
- 28) ケルン, J. / 朝岡正雄ほか監訳, スポーツの戦術入門, 大修館書店, 東京, p.97 (1998)
- 29) 前掲 2), p.428 (2002)
- 30) 前掲 2), p.151 (2002)